



早石修記念海外留学助成による留学体験記

2021年度採択者 小林 航

2021年4月から2022年の3月まで本助成金の支援を受け、オーストリア科学アカデミー所属 Institute of Molecular Biotechnology (IMBA) およびドイツのマックス・プランク生化学研究所の Kikuë Tachibana 博士の下にて研究活動を行うことができました。現在では、引き続き同研究室にて、受精後に引き起こる細胞の分化全能性の獲得機構について研究を行っております。

海外留学以前は主に、減数分裂期組換えがクロマチン上でどのように成し遂げられるのかを試験管内再構成系を用いて研究しておりました。そして、これまでの研究活動を通して、減数分裂を経て終末分化した配偶子のクロマチンはどのように初期化され、分化全能性を獲得するのかという点に強く興味を抱きました。そこで、受精卵の分化全能性の解明を目指し、エピゲノムとクロマチン高次構造に着目して研究を行っている Kikuë Tachibana 博士の研究室に留学させていただくことになりました。

本助成期間中において最も大きなイベントは、ラボの引っ越しでした。オーストリアのウィーンからドイツのミュンヘンまでは距離的には遠くはないため、移動自体は困難ではありませんが、海外での慣れない住居探しや家具家電の全てのセットアップを行う一苦勞は、海外生活でこそ体験できるものでした。また、引っ越した先の新しいラボにはまだベンチのみで、全く機材が置かれていない状態でしたので、技官さんたちと機器の搬入や組み立てを行ったのは良い思い出です。それと同時に、ポスドクという貴重な期間において、一時的に実験に従事することができなかったため焦りも少し感じておりましたが、幸いにも比較的早くに再開することができました。

マックス・プランク生化学研究所は、ミュンヘンの郊外に位置する研究所です。ノーベル賞受賞者も在籍するこの研究所は、生化学、構造生物学、細胞生物学などの多岐に

わたる部門があります。ファシリティも充実しており、手厚いサポートが受けられる非常に研究環境が良い場所です。都会暮らしに慣れていて私にとっては、市内から遠いのが唯一の難点です。私が所属する Tachibana 研究室は国際色豊かな研究室であり、様々な文化や背景を持った学生・ポスドク・技官が21名在籍します。名前からわかるように、ボスの Tachibana 博士はオーストリアと日本人のハーフの方です。Tachibana 博士は非常にオープンマインドな人で、ディスカッション中に様々な意見やアイデアを柔軟に受け入れ、そしてその実行に対しての決断とゴーサインが極めて早い印象です。そのため、検証したい仮説や試したい実験をどんどん推し進めることができました。また、彼女は生物学的な問いと、その答えがもたらす新たなコンセプトを常に念頭に考えており、私が全く思いも寄らなかった疑問・コンセプトを投げかけられては非常に感銘を受けました。今後もボスとのディスカッションの時間を大事にし、サイエンスへの考え方について沢山吸収していきたいと思います。

最後に、ミュンヘンは何と言ってもビールが格別に美味しいです。正直、ウィーンのビールはお世辞にも美味しいとは言えなかったのですが、これだけでも引っ越して良かったと思うときがあります。土日や祝日になると、ミュンヘンの人々が華やかな民族衣装でお出かけする様子がよく見受けられます。ミュンヘンの人々に紛れながら、ビアガーデンでビールを片手にし、楽しげなバイエルン音楽を聞くだけで、また明日からも頑張ろうと、日々の研究の活力が湧いて出ます。

(現 マックス・プランク生化学研究所
Kikuë Tachibana 研究室
博士研究員)

※早石修記念海外留学助成について

日本生化学会では2017年度より「早石修記念海外留学助成」の募集を開始いたしました。この助成制度は、日本の生化学会に多大な貢献をされた故早石修名誉会員（2015年12月17日ご逝去）を記念して、小野薬品工業株式会社様のご寄付によって設立されたものです。助成額は1件500万円、毎年8名まで選出します。応募資格その他詳細は学会ウェブサイト (<http://www.jbsoc.or.jp/support/hayaishi>) 掲載の募集要項をご覧ください。